

岐阜県方言談話資料に見られる回想の「～ヨル」

Retrospective form '-yoru' in Gifu dialect discourse materials

山田敏弘¹

YAMADA Toshihiro

[キーワード Keyword]	岐阜県方言談話資料、形容詞、継続、ヨル、回想 Gifu dialect discourse materials, adjectives, progressive, -yoru, retrospective
[所 属 Institution]	¹ 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

[要 旨 Abstract] 西日本方言を中心に継続の「ヨル」については、すでに多くの考察がある。しかしながら、岐阜県の「ヨル」に関する報告・考察は、いずれも少なく、その用法、用例、分布等に関する考察も乏しいと言わざるをえない状況である。特に、形容詞に「ヨル」が付く形に関する報告・考察はわずかである。

本考察では、まず、動詞に「ヨル」が付加される用例の用法を検討し、どのような地域で観察されるのかを、岐阜県で昭和40年代に収録された談話資料を中心に確認する。その後、形容詞に付く「ヨル」についても、談話資料から実例を挙げつつ考察していく。

結果として、現在はほぼ使用が認められなくなった岐阜市以西の県南西部においても継続の「ヨル」の用例が回想用法として一定数見られること、また、形容詞に「ヨル(ヨッタ)」が付加された回想の用法が岐阜市周辺にもかつてあったことを談話資料から得られた実例をもとに述べていく。さらに、関西周辺部であるからこそ岐阜県はこの「ヨル」の変容を探る好地であることを明らかにしていく。

1. はじめに

動詞「オル」に由来する補助的形式の「ヨル」は、西日本方言において、継続(進行)あるいは未完了を表す形式として広く用いられている。岐阜県方言でも、岐阜市近辺以西においては、完了も表す「トル」でほぼ置換された様相であるが、中濃、東濃、飛騨地方では、いまだに継続を表す「ヨル」の使用が確認される。

岐阜県内におけるこのような「ヨル」に関する先行研究については、総じて貧弱である。加藤毅(1983)は、岐阜県の「助動詞」を概観する中で、「西美濃」に「継続補助動詞」の「ヨル」を挙げ「起キヨル」を例に出すが、「東美濃」に関する記述は見られない。また、飛騨に関しては「継続」の形式として「トル」を挙げ、「一部に降りヨル形も認められる」とするのみである。地点を絞った記述としては、渡辺亜希子(1997)に中濃地方の美濃加茂市のアスペクト形式に関する記述が見られる。特に渡辺(1997)は、「ヨール」「オル」を含む「ヨル」類が持つ用法を、現在眼前で生じている「外は雨が降りよーる」などの用法の他、①未来において確実に起こる動作の継続を表す(<例>明日の今頃は北海道へいきよーるね。先に帰ってご飯をつくりよーるね)、②近い過去、遠い過去に関係なく使われ、話し手の見聞や経験を伝える(<例>今日映画にいくって言よーったよ。あんたのことを話しよーったよ)、③動作の反復や習慣を表す(<例>くしゃみばっかしよーる、日曜日はいつも遊びにいきよーる)、④動作の開始直前を表す(「もうちょっとで」といった意味の語を伴うことが多い)(<例>信号が赤になりよーる、赤ちゃんがボタンを口に入れよーるわ)と4用法を区別している。特に、「オキトリョーッタ」のような結果状態の「トル」と継続の「ヨル」の複合形や、形容詞に「ヨル」が付加された形式にも言及しており、美濃加茂市という地域に限られた報告であるが、用例の指摘として広範囲にわたり詳細である。県内のより広範囲には、山田敏弘(2002, 2006, 2009)に飛騨、東濃、郡上における「ヨル」の用法の記述をまとめた報告が見られる。

上記先行研究は、いずれも報告としての価値はあるが、岐阜県内の過去及び現在における地域的偏りを含む「ヨル」の使用実態と、さらに述語の種類による分析は不十分である。特に、形容詞や存在動詞のような

と考える。ただ、現在臨地調査を行っても、すでに半世紀以上前に廃れたその土地の用法を知ることはできない。さいわい、岐阜県内には豊富な昭和40年代の方言談話音声資料が残っている。今回、これらの談話資料を用いて、岐阜県内の継続相を表すヨル形の記述の厚みを増そうと試みた。

重要な方言談話音声資料の1つは、岐阜県図書館所蔵の「飛騨・美濃古老の思い出話」である。これは、昭和40年代前半に録音された資料で、基本的に岐阜県立図書館発行の『山と水に生きる』2巻（以下、引用の際には「山と水」と略記）に話の内容自体は採録されている。問題は、山田(2018, 20)でも詳述したが、録音資料の話者の著作権処理が済んでいないことである。その処理の難しさをここであえて繰り返すことはしないが、今回は、著作権に触れないよう、原則として「山と川」資料に依りながら、特に文末表現を録音資料で確認するという形を採ることとする。

もう1つの方言談話資料は、国立国語研究所のCOJADSプロジェクトとして進められている「日本語諸方言コーパス」（以下、引用の際には「COJADS21・地点名」と略記）である。こちら、昭和40年代後半から50年代にかけての県内4箇所の音声データが残っており、このうち岐阜市に関しては山田が書き起こしの最終確認をおこなっており、信頼できるデータとなっている。この資料は未刊行であるが、担当した部分についての使用許可も得ているため、談話音声資料として取り扱っていく。

実際、各地に残る方言談話の書き起こし資料は、玉石混淆である。特定の語句や用法は、聞き覚えがない書き起こし作業には誤って理解されることもあり、その地の方言に精通した方言研究者による書き起こしがされたものでなければ、誤って書き起こされたり見落とされたりすることもある。この欠点を補うには、直接、音声資料で確認するしかない。今回、上記2種類の音声談話委資料を活用して、より正確に文字化された資料を基にした考察として残しておきたいと考えた。

以下、述語の種類順でまず検討し、その後、おおまかな県内の分布についても見ていく。

3. 述語の種類ごとのヨル形の用法

3.1 動作動詞のヨル形が継続（反復）を表す用法

まず、動作動詞に対して用いられ継続を表すヨル形について、談話資料から用例を見ておく。

- (4) (関東大震災で糸が燃えてしまったので、株式会社にしているいろいろな)人に株持ってやってもらったわけやけど、いつまでもこんなことやっていきよォリやア、その衆に損をかけるし(「山と水」東濃・飛騨 p.53: 加茂郡白川町黒川 音声: 14m 10s あたり)
- (5) ホント ソージュシガ ミエルンヤ *** ヨコ ムイテ ミヨルヤツ ミエルンヤ。(本当に操縦士が見えるのだ。横を向いて見ている奴が見えるのだ。)(COJADS21: 岐阜市03)

まずは非過去形の例である。話者は、(4)が図1の金山町白山町にも近い中濃北部の加茂郡白川町黒川、(5)が岐阜駅に近い旧市街に生育した男性である。いずれも、昭和40年代から50年代という収録当時の年齢から考えて、明治末生まれか大正時代生まれであったと推測される。『方言文法全国地図』の調査よりも、わずかに前の世代のことばとして、継続のヨル形は、より広範囲に多数確認される。『方言文法全国地図』に示された結果は、当然のことながら、その地点に当該語形がなく、過去にもなかったということを示すものではないのである。

(4)と(5)の用例は非過去形を挙げたが、いずれも過去の述懐談である。「思い出話」という談話資料の性質上、眼前で展開される事態およびこれから生じうる事態に対して現在形を用いている用例を見つけることはできなかった。一方、過去の習慣的動作に対してヨッタ形が用いられる用例はさらに多く見られる。

- (6) カズノコニ タマリカケテ (中略) キダマリ ポイット カケテ カズノコ ヒヤカエタルモンヤデ ダーット アケテ ミズキッテ コヤ エーンジャデ ホテ ジャーチャーチャーチャー タベヨッタ。(数の子に醤油をかけて(中略)生醤油をさっとかけて、数の子は冷やしてあるものだから、ざっと(ざるに)明けて水を切ってくればいいのだから、そうやって[不明]食べていた)

(COJADS21・岐阜市02・男性A)

- (7) 石と金で打ち合うと火がでるやら、そいで“つけ木”でつけて火を焚きよったら、マッチがでて、ランプもカンテラも楽につけれるでありがたいっていったもんや。（「山と水」東濃・飛驒 p.25：美濃加茂市 音声：6m 20s あたり）

(6)の「食べる」も(7)の「(火を)焚く」も意志的に行われた過去の習慣的動作である。主語は話者自身、あるいは話者を含む一人称であり、必ずしも三人称の動作を描写したとは限らない。一人称自らの動作を過去の回想として描いている。

もちろん、三人称が主語になっている動作動詞の用例も散見される。

- (8) 船頭は仲間を組むってこともなしに、ひとりひとり、請負師ンとこへ石を積んでいきや、買ってくれよったんやでね。（「山と水」中・西濃 p.15：岐阜市長良 音声：46m 30s あたり）

共通語で意志を表すために「買ってきましょう」と言えない（推量の意味では言える）ことからわかるように、補助動詞の「てくれる」は、第三者の意志を表す形式と共起しない。その点から考えても、すでに、(8)などは、意志動詞との共起とは言いがたく、非意志的な述語のヨル形と呼んでもよい。さらに、回想で語られる過去の習慣的動作は、1回1回の事態生起は時間的幅をもったりもたなかったりするが、それが繰り返されることによって継続的であると認識されるものである。しかし、共通語でも、「毎日、近所の低山に登っている（登っていた）」と言っても、「毎日、近所の低山に登る（登った）」と言っても、どちらも文法的であるように、岐阜県方言においても非ヨル形で言い表されることもある。

3.2 状態性述語に「ヨッタ」を付加して回想を表す用法

回想として語られる過去の習慣的できごととは、繰り返されることで継続性が認識されるため、1回1回のできごと生起に時間の幅がなくてもよい。逆に、非過去においては、述語自体に時間的な幅が認められるためにあえて継続を表す形式を付加すると冗長となる状態性述語に対しても、過去においては、事態継続とは別の原理で継続を表すヨル形を用いているため冗長とならない。このことから、過去の回想という文脈では、動作動詞と同じように、状態性述語のヨッタ形が多く用いられることになる。

- (9) わたしは百姓生まれやが、百姓はやっとらん。京都へいって、瀬戸物屋におったけども、瀬戸物でかすのはあかんと、逃げてきてまった。あの時分は岐阜から京都まで、八十銭（汽車賃）でゆけよった。ほでも逃げてきたんやで、ぜには無し、大津の街道でナス畑へは行ってナスビを二つ食ったが、あのくらしいまいものはなかった。二日かかって来よったわな。（「山と水」中・西濃p.11：岐阜市長良 音声：14m 40s あたり）
- (10) 朝出て、北方まで二時間くらいかかりよったで七時か七時半ぐらいに着きよった（「山と水」東濃・飛驒 p.16：美濃加茂市 音声欠）
- (11) ハェーキューノ パンツテッタラ マックロヤッタヤロ。 ナモ。 ホーテ コー ワルト ワラン デテクル。 シ ワラミタエーナモンガ ズーット ツズキヨル。（配給のパンは真っ黒だっただろう？ そしてこう割ると中から藁が出てくる。藁みたいなものがずっと続いている）（COJADS21：岐阜市02）

(9)の「ゆけよった」は、意志動詞の可能形に対して、過去の習慣的動作・状態を表すためにヨル形が用いられている。意志動詞の可能形は非意志的な状態性述語である。ヨル形は、意志的事態のみならず非意志的事態に対しても用いられることが確認できる。一方で、一回きりの動作である「逃げてきてまった」や「身の上しまつてまつて」などは非ヨル形で示されている。不思議なのが波線部の「来よった」である。これは1回きりの動作であり、ここでヨル形が用いられることは考えにくい。実際に音声と照合すると、ここは「来

とった」となっており、ヨル形は用いられていなかった。当該談話は採話者との会話の形で行われており、記録をした採話者の「編集」によって整えられたものである。このような誤った文字起こしが皆無であるとは言えないことは、当該談話の内容としての価値を低めるものではないが、書き起こされた言語資料を、そのまま言語事実として捉える危険性を含むことを示している。

一方で、(10)のような「かかりよった」は、過去の習慣的状态を回想して同様にヨッタ形が用いられている。(9)の「ゆけよった」と同様、状態性述語の場合にも、岐阜市以東・以北では、回想用法としてヨル形(ヨッタ形)が用いられていたことは間違いない。

やや例外的なのは(11)である。(11)は、回想という文脈ではあるが、あたかも眼前に現在ある状態を描くかのように非過去のヨル形が用いられている。しかも、「続いている」というのは、変化が先に起こっているとすれば結果状態とも読み取れる。それでも、過去に繰り返し生じた事態を回想してヨル形で表していると言えよう。

一方で、前述の通り、過去の習慣的事態であっても、必ずしもヨル形が用いられないこともある。

- (12) イカダバエは岐阜の名物でね、冬になるとさいが非常に売れよった。よその川へ行くときは四人ぐらいの仲間を組んで、汽車で夜明けには川ぐろに着く。岐阜へは、二時や三時までには帰らんらんで、向こうでは夜明けから十時か、十一時までしか仕事やりゃせんで、三時間か四時間。それで、三十貫か、四十貫とってきた。氷なんか入れへん、冬だで寒いでね。十月の十五日(鶴飼の終り)からの話やぞい。(「山と水」中・西濃 pp.16-17: 岐阜市長良 音声: 1h 08m 40sあたり)

(12)では、「売れよった」は、過去の習慣的状态でありヨル形で表されているが、その後続く「川ぐろに着く」「四十貫とってきた」などは過去の習慣的動作であるにもかかわらず非ヨル形で表されている。イカダバエという小魚を捕る漁法に従事したことが継続的であったことは、「三十貫か、四十貫とってきた」という幅のある表現から読み取ることができるが、ここでは動作が非ヨル形で表されているのである。それはいったいなぜであろうか。単に共通語と同じく、過去の習慣的動作・状態がテイル形・非テイル形、どちらでも表されることと同じであろうか。

その使い分け基準は明確にはわからない。しかし、(12)では時間が細かく示されており、現在から過去を習慣的に描写しているというよりも、詳細な記述内容で、その時点に入り込んで叙述しているような印象を受ける。過去を習慣的に回想しているというよりも、習慣的事態から一回の具体的な思い出を取り出して語っているようである。ただ、これも印象であり、明確な基準があるわけではない。

一方で、過去の習慣的動作・状態であっても、昭和40～50年代の岐阜市あたりでは、必ずしもヨル形を用いなければならないというわけではない状況であったことが、ヨル形を用いない岩田坂や加納の談話資料などからも読み取れる。すなわち、継続の意味としては、過去の回想の用法もふくめて、この頃に衰退しはじめていたものと考えてよいのではないか。

しかし、反面、「山と川」資料には、岐阜市の談話資料にも、状態動詞「ある」に対してヨル形が用いられた用例が観察された。

- (13) あえーまに來たてがみが、わたし見るとさえーが、ありよりましたな、ちっとかえーたやつが。兵隊は、はがきやなしに折りたたみで乗よりましたでな。こんなとこに、手紙あるなど、チツチツと見ることもありよったけど(「山と水」中・西濃p.72 岐阜市長森 8m 55sあたり)

共通語の「ある」はテイル形にならないことは、言うまでもない。

- (14) *たまに來た手紙があっていた。

- (15) *こんなところに、手紙があるなど、チラチラ見ることはあっていたけど

このように、岐阜方言のヨル形の守備範囲は、過去の回想という用法に限っては共通語のテイル形より広く、回想として繰り返された述語動詞に広く付加されることが確認された。また、国立国語研究所『方言文法全国地図』202図では、岐阜県内で1地点、現在の下呂市金山町で「ありよる」が観察されているとの報告があるが、実際の「ありよる」は、やや広範囲に用いられていたことは間違いないであろう。用法、地点ともに、今から半世紀前の岐阜県内では、ヨル形が広く用いられていたことを確認した。

3.3 形容詞に「ヨル」を付加する形式

前節までで見たように、岐阜方言には共通語においてテイル形を付加して表現し得ない用法が存在する。それは、形容詞や形容動詞、名詞+指定辞などの状態的述語についても同じであろうか。

すでにこのような形式を生産的に発する話者を見つけることは困難となった。このような形式を使用するという話者に最後に直接会ったのは、2001年に岐阜大学に着任してすぐの頃にお話を伺った可児郡御嵩町で老年層の女性と、2007年頃に郡上市美並町粥川での別件調査の折に伺った当時70代の女性であった。特に、粥川での調査の際には、ほかの60代の女性や70代の男性が使わないという中で、当該女性のみが唯一使用していた。「昔はさむかりよった」のような直接経験の回想に対して使うということ以外、詳しくは伺うことはできなかったが、15年前の70代の中で使用するかしないかの違いが、同一地区の中でもあったことは明確に主張できる。

それ以来、ずっと岐阜県内で使用された具体的な形容詞に付加される具体的な用例を探していたが、今回、実例がCOJADS資料から確認されたので報告をする。

- (16) (柳ヶ瀬にあった郭の話) オヤマヤガ アッテネ。 ソノ オヤマヤガ ミーンナ ヨルン ナルト サエーガ コーシノ ナカニ キレーニ コシラエテ ダラート ナランデ ゴザルト。 オトコノ シトガ ソコイ イッテ イッショウケンメー ナガメテ ソシテ カイヨーゴザッタ。ホントニ ニギワシカリヨッタ。 イマワ マー ソンナ。(女形屋があつてね。 その女形屋がみんな夜になると格子の中にきれいに拵えてずらっと並んでいらっしやると。男の人がそこへ行行って一生懸命ながめてそして 買っていらっしやった。ほんとうに 賑やかだった。今は もう そんな(店はない。)) (COJADS21:岐阜市10)
- (17) アノコロワ ヒゲ ミナ ハヤイテ ゴザッタンヤデ ピーント ハチノジニ ソヤッテミンサイ コドモン イッタラ シカラレル オソガエーダケヤワ ネエー センセーデサエ オソガカッタ ンジャモノ ソンナトコイ イッテ ミンサイ オソガカリヨッタガネ。(あのころは 髭をみなどは やしていらっしやったのだから、ピンと八の字に、そうやってみなさい、子供が(県庁へ)行ったら叱られる。おそろしいだけだわ。ねえ。先生でさえ恐ろしかったの。だから、そんなところへ行行ってみなさい。おそろしがったね。) (COJADS21:岐阜市11)
- (18) ホントヤ ホントヤ。 マー トニカク ワッチンタノ ジダエーワナ マ ブシノ ナガレノ シトガ ケンチョイ イッテモ シャクショイ イッテモネ ドコノ カンチョイ イッテモ ネ ホントニ カンインサマ カンインサマッテ オソガカリヨッタ。(そうだそうだ。まあ、とにかく、私らの時代はね、ま、武士の流れの人が県庁へ行っても市役所へ行ってもね、どこの県庁へ行ってもね、ほんとに官員様、官員様と言って怖かった。) (COJADS21:岐阜市11)
- (19) タイテー カワボタイ ポット コーヤッタラ ウガ ザーット ボッテ キヤガルデ チョット アテガタルト アエーカ モー ナンジュッピキテ ダダダダダーット ハエッテ キヨッタガネ。(B ホン。) ホンナモン トルノガ マー オモシロカリヨッタガ イマワ マー ホンナモン ユメ ミタエーナモンヤ(たいてい、川岸へこうやったら鵜が追ってくるので、ちょっと水につけると鮎がもう何十匹も入ってきたがね。そんなものを取るのおもしろかったが、今はそんなもの夢みたいなものだ。) (COJADS21:岐阜市13)

このような形容詞+カリヨッタは、すべて回想の場面で用いられている。(16)の「ニギワシカリヨッタ」

は、共通語訳では「賑やかだ」との形容動詞であるが、当地の方言では「ニギワシイ」という形容詞であり、カリ活用によって当該語形が得られている。一方、(17)(18)は、同一話者が「オソガイ」ということばを何度も用いている。「オソガカリヨッタ」は、特に「さびしい」が「さびしがる」と、第三者の心的状況を推測する用法として用いられることから「オソガガリヨッタ」と混同する可能性もある。幸い、この語形にははじめに遭遇した筆者ではあったが、明瞭に音声の違いは聴き取れた。これは、自らの経験を振り返る中で用いられている回想表現としてのヨッタ形である。さらに、(19)も、自らの感覚として「おもしろかった」と回想の中で述べるのに「オモシロカリヨッタ」とヨッタ形を用いている。

このような「形容詞+カリヨル」の用法は、渡辺(1997:88,94)において、美濃加茂市方言として「オソカリヨッタ(遅かった)」、「サムカリヨッタ(寒かった)」、「ナカリヨッタ(なかった)」の3例が報告されるくらいで、県内の報告・考察はほとんどない。また、地理的にも、岐阜市のような県中部に位置する都市部でかつて聞かれたことは、その実例を報告するだけでも価値があろう。ただし、渡辺(1997)で内省として報告された形容詞「ない」のヨル形は、今回の岐阜市の談話資料の範囲では確認できなかった。

また、用法の詳細について、九州地方の「今日はヌッカリヨル(温かい)」や「夕焼ケン赤カリヨル(赤い)」(用例は、工藤2014:482より、熊本県松橋方言の用例)のような非過去の用法は確認できなかった。これら「形容詞+カリヨル」の非過去用法が、本来的になかったのか、それとも、本来あったが、「形容詞+カリヨル」が廃れる中で、過去の回想にのみ残ったのかは、今となっては知る術もない。しかし、従来ほとんど記述のなかった岐阜県方言における「形容詞+カリヨル(カリヨッタ)」について、実例を示し考察の俎上に載せることができたことは画期的なことである。

なお、このような「形容詞+カリヨッタ」は、「山と川」資料に見つけることはできなかった。しかし、山田(2009)でも述べたように、この廃れた形式の認知には熟達した方言知識が必要である。郡上方言調査で「サムカリヨッタ」が多くて観察されたのは、実は、「サムガリヨッタ」という語形との混同のせいであったことがわかっている。また、COJADSの(16)～(19)の用例も当初、形容詞のヨル形とは捉えていない翻訳が当てられていた。方言調査も方言談話も丹念に検討しなければならない。

もしかしたら、「山と川」資料にも、この形容詞のヨル形が捉え違いされていないとも限らない。そこで、「山と川」資料を再検討した。「山と川」資料には、岐阜県図書館に保管されている調査時の音声データが100時間を超えて存在しており、今回、そのすべてを確認できたわけではないが、聴いた限りにおいて、形容詞+カリヨル(カリヨッタ)は確認できなかった。今後、もう少し丹念に探したい。

なお、形容動詞や名詞述語の場合の「～でありよった」も、今回の談話資料の中には認められなかった。

4. 回想用法の個人差と地域差

一般に、現在では関西に近い岐阜県西濃地方では、継続を表すヨル形は観察されないとされる。しかしながら、「山と川」資料においては、過去の習慣的動作を回想のヨッタ形を含む用例が西濃地方でも一定数見つかる。

- (20) 田植えというと、六月十二日ぐらいから始めたし、稲刈りというと、早うて十一月の三日の天長節(明治期)を過ぎると刈りよったんです。(「山と水」中・西濃 p.109 海津町 音声欠)
- (21) (東海道線の話) そうして関ヶ原から東へは、急に坂になつとるですやろ。関ヶ原の駅から東へ行くと、ずうっと下がってって、汽車が行ってもわからんくらい下がってまうもんでなア。よう駅長が「これ丸いのやぜ、地球が」と笑わせよった。(「山と水」「山と水」中・西濃 p.160 関ヶ原町 音声: 6m 45s あたり)

(20)は自分自身を含む習慣的動作であり、軽卑の意味は含まない。(21)は3人称である「駅長」の動作の描写である。実際の音声では、「言いよった」も使われており、これらは軽卑の意味にも読めなくはないが、文脈からすれば単なる継続(習慣的動作)と言ってよいであろう。

では、西濃地方と岐阜市などでは、どれくらい違うのであろうか。「山と水」資料で用いられているヨ

ル形（ヨッタ形を含む）を数えると次のようになる。「資料分量」は、Microsoft Wordの字数カウント機能を用いて数えた資料の文字数である。当然、漢字で表記するか仮名書きするかで字数は異なり、読点の打ち方でも増減するため、おおよその目安でしかない。なお、市郡は出版当時の区域を指し、安八郡資料はない。

旧郡域	海津郡	養老郡	不破郡	揖斐郡	大垣市	本巢郡	岐阜市
資料分量(字)	6,184	12,215	8,380	20,927	10,962	20,562	27,206
ヨル形用例数	1	3	1	7	2	23	42
1000字当たり	0.16	0.25	0.12	0.33	0.18	1.19	1.54

表1 『山と水に生きる』に見られるヨル形述語の数

もちろん、話題によって特定の語や表現の出現回数は異なる上、先にも述べたように、書き起こしというフィルターが入ることによって正確さを損なった部分があることも否めない。そのため、この数字が正確だとは当然言い切れないが、1000字当たりのヨル形出現回数を比較してみると、岐阜県でもっとも西に位置する4郡（南から海津郡、養老郡、不破郡、揖斐郡）および大垣市という、いわゆる西濃地方では、平均でも0.25回/1000字と少ない。揖斐川を挟んで東に位置する本巢郡の5分の1ほどでしかないことから、西濃地域との境界となっている揖斐川の東西である程度の差があることは、表1からおおよそ理解されよう。

こう述べると、やはり岐阜県西部に継続を表すヨル形は、図1に示した『方言文法全国地図』に示された結果を裏付けていると考えられそうであるが、実際には少数ながら存在することは注目に値する。全く使用されていないわけではないのである。では、『方言文法全国地図』の調査結果が間違っているかということではない。『方言文法全国地図』の調査項目は、現在の眼前に展開されている持続的動作に対するの質問であり、今回得られたヨル形（ヨッタ形）の意味はすべて過去の回想であったという違いがある。『山と水に生きる』資料に観察された非過去のヨル形は、いずれも従属節の用法で、主節は過去時制を採っていたか、あるいは、談話中、背景的情報として示された非過去形であった。すなわち、過去の回想がすべてであった。その意味で、継続的事態の眼前描写よりも、習慣的事態の回想という機能が、西濃方言には残りやすかったということであり、さらに広げて言えば、言語としてより敏感であるべき区分なのであろう。

また、動詞の性質による差もあると考えられる。西濃方言資料の記述を見てみると、『南濃町史』、『平田町史』には、それぞれ、「ゆきよる いきつつある」、「きよる（あちらから） 来つつある」のように記述される。いずれも、語彙的に移動動詞に付く場合に限定されている。すなわち、「行っている」「来ている」のようなテイル形が結果状態を表すことによりヨル形が用いられやすい、あるいは、消失の途上にあつて残りやすかったことを示している。逆に言えば、それ以外の動詞ではトル形で置換しても不都合がないということである。一方、大垣市での語彙・文法のもっとも詳細な記述である杉崎・植川(2002)にも、「①第三者の行為に対して傍観的な態度で言及するとき使用する。（中略）②非情の物の動作については「不利益・迷惑・不快を表す表現となる。「雨が降りよる」は、「私が望まないのに雨が降りやがる」という意味となり、継続態「雨が降りつつある」を表すものではない。」（同：280）とある。非過去形におけるアスペクトの意味は消失したとの記述であるが、過去の回想に関する記述は見られない。

西濃地方では、このように、岐阜県内で特にヨル形の意味・用法が限定されていながらも、つい最近まで回想用法や限定された動詞について使用が認められたことを確認した。

では、岐阜市の状況はどうであろうか。この『山と水に生きる』に載録されている岐阜市の談話のうち、長良、芥見、湊町の話者は過去の回想にヨル形を用いているが、岩田坂、加納の話者は、文字起こしされた範囲の数分間の談話内では、ヨル形を用いていない。録音資料を聴いた限りにおいても、ヨル形の使用は認められなかった。このことから、同じ市内で数キロと離れていない地点でも違いがあったと言える。これは、同一市内での地域差なのか、あるいは個人差なのであろうか。たしかに、「食べない」の形式を調査した際、長良川より北の岐阜市内では「食べーへん」、南では「食べへん」が多かったとこともあり、同じ市内といえども同じ形式を用いているとは言い切れない。ただ、用法としてある地域で廃れていく際には、やはり同

時期の調査であっても「人によって言うか言わないか」の差は大きいであろう。

5. ヨル形の諸用法と回想用法

ヨル形の基本的意味・用法は、継続の表示と言われるが、岐阜県北部の郡上市および飛騨地方では、「車がぶつかりよった」がぶつかっていないことを表すなど、未完了が根源的な意味なのであろう。その未完了(imperfective)とは、ロシア語などスラブ語においては、もっとも敏感に区別される文法カテゴリーであるようにアスペクトの基本的素性の1つと言える一方、ドイツ語やフランス語などそれほど敏感ではない言語もある。このような完了・未完了という区別の敏感さは言語内でも差があり、日本国内でも共通語よりも西日本方言の方がより敏感である。岐阜県方言は、この西日本方言の1つとして、完了のトル形と未完了のヨル形を区別することが基本であったが、現在はその区別が失われつつあるという状況である。

さらに、その未完了の用法のうち、現在の眼前における継続ではなく、過去というテンスも関わって回想用法が岐阜県の特に西濃方言から岐阜市あたりには、残りやすい状況となっている(なってきた)ことが本考察で指摘された。この点は、ロマンス諸語における過去のアスペクト分化と軌を一にする特徴である。現在進行形を持たないフランス語やスペイン語も、過去においては半過去という継続的な事態を描く文法形式を有している。たとえば、フランス語は「雨が降る」も「雨が降っている」も現在形の“*Il pleut*”で表されるが、過去になると「雨が降った」は“*Il a plu*”と完了形を用いた複合過去を用いるのが、少なくとも現代語においては一般的である反面、時間的幅を持てば“*Il pleuvait*”のように半過去を用いると区別される。イタリア語では、現在時制に英語の“*be + ~ing*”形と同じく持続を表す“*stare ~a/endo*”形を用いるが、過去の完了・未完了の区別がある。これらは、ラテン語以来続く区別である。このロマンス諸語からすべての言語に一般化することは正しくないかもしれないが、他の言語においても、一般的に過去の事象の方が、時間は詳しく切り分けられる。Comrie(1985)は、タンザニアのBantu諸語の1つであるHaya語の例を引き、過去が3区分されるのに対して未来は2区分であること(ibid:87)や、ジョージア語でも完了・未完了は、過去時制においてのみ区別されると報告する(ibid:32)など、一般に、「時間の距離による区分は、過去の方が未来よりも頻繁である(Temporal distance oppositions are, as already noted, more frequent in the past than in the future (ibid : 87))」とする。このことをそのまま習慣的事態の回想用法に当てはめることの妥当性は別途検討する必要があるだろうが、過去においてテンス・アスペクトが詳述される傾向にあるのは、人間の記憶の特徴と言えよう。

日本語の方言を見渡せば、工藤(2014)ほかの報告において、さまざまなヨル形の意味・機能が理論付けられているが、状態であれ動作であれ繰り返しが状態性として表現されることもまたヨル形本来の「事態の存在」という機能に相応しい機能であると考えられる。それがまさに回想であり、岐阜県方言では、状態性述語にまで現在時制で一時性を表示することは選択しなかったが、過去の習慣的動作の描写、つまり回想こそ表現すべき意味・機能であると捉え伝えてきたのであろう。

この点は、もう少し考えてみる必要があるだろう。今後の課題としたい。

6. おわりに

以上、岐阜県方言におけるヨル形(ヨッタ形)の意味・用法と分布を、実際の談話資料を用いて検討してきた。半世紀ほど前の状況は次のようにまとめられる。

- ① 西濃地方では、ほぼ継続のヨル形は廃れた反面、回想用法のみ稀に見られる。
- ② 岐阜市近辺では、継続の用法に加え、回想用法では状態動詞や形容詞にも付加される用例が見られる。
- ③ 中濃、東濃、飛騨では、回想用法はもとより継続のヨル形が広く用いられている。

そして、この③の地域は、現在でも一定の使用が認められる。

このように、岐阜県のヨル形は、広い意味での継続の意味・機能を根底に持ちながら、西に向かうほど用法の縮小と述語との共起制限の厳格化がきつくなるというグラデーションをなして県内に分布し、そして変化してきたことが確認できた。

最後に、このような談話資料を用いることの利点と欠点をまとめておきたい。方言調査のような臨地調査

で1地点1話者を代表させて行う方言調査、およびその結果としての分布図は、語彙や珍しい文法形式のように意識を問わないと得られない形式を探る上で有効である。一方で、文末によく現れるアスペクト形式のように、多様な用法をもち述語ごとに制限も異なる形式については、談話資料でより詳細に明らかにできるメリットがあることも指摘できた。当然、談話資料を正確に書き起こす手間は相当なものであり、また正確さも慎重に確認する必要があるが、県内方言の記述を完成させる上では必要不可欠な研究手法である。

談話の中で数万字に1回用いられる形式は、話者の中でどのような意識となっているのであろうか。本人も無意識に使用していて、意識的に有無を答えさせる場合と異なる結果が得られることがあることは、方言調査をしたことのある人間であれば実感としてもっているであろう。意識して答えられる語・表現もあれば、無意識で使っていて意識とのずれがある語・表現もある。ヨル形の細かい用法については、無意識に用いられる部分もある。談話資料を用いてはじめて明らかになる部分もある。今後も岐阜県方言の談話を積極的に活用して、岐阜県方言に関する真の文法記述を深めていきたい。

参考文献

- 奥村三雄編(1976)『岐阜県方言の研究』大衆書房
 加藤毅(1983)「岐阜県の方言」『講座方言学6 中部地方の方言』国書刊行会
 岐阜県立図書館(1970)『山と水に生きる 中・西濃篇』
 岐阜県立図書館(1971)『山と水に生きる 東濃・飛騨篇』
 杉崎好洋・植川千代(2002)『美濃大垣方言辞典』美濃民俗文化の会
 工藤真由美(2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
 村上智美(2005)「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」3 東西対立の中の「九州方言」形容詞を中心に」『日本語学』24-7月号, 70-78
 山田敏弘(2002)『ぎふ・ことばの研究ノート第1集 飛騨方言資料に見られる文法項目』私家版
 山田敏弘(2006)『ぎふ・ことばの研究ノート第5集 東濃方言資料に見られる文法項目』私家版
 山田敏弘(2009)『ぎふ・ことばの研究ノート第8集 郡上方言の地域差と年代差』私家版
 山田敏弘(2011)『ぎふ・ことばの研究ノート第10集 西濃方言資料に見られる文法項目』私家版
 山田敏弘(2018)「『飛騨美濃古老の思い出話』の方言資料的価値」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』67-1, 1-10
 山田敏弘(2020)「『飛騨美濃古老の思い出話』の方言資料的価値2」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』68-2, 1-10
 渡辺亜希子(1997)「岐阜県美濃加茂方言の文法的特徴—テンス・アスペクト表現を中心に」『名古屋・方言研究会 会報』14, 85-96
 Comrie, Bernard (1976) *Aspect*, Cambridge University Press
 Comrie, Bernard (1985) *Tense*, Cambridge University Press

付記

本研究は、科研費基盤研究(C)「昭和40年代採録岐阜県方言談話資料作成とその分析」(課題番号17K02771 研究代表者:山田敏弘)及び「岐阜県方言に関する昭和音声資料の分析」(課題番号21K00546 研究代表者:山田敏弘)の成果の一部である。

(令和4年9月30日受理)